

2023 年度成人科テキスト

「聖書日課と分かち合い」 7月号



名前

---



# お知らせ

- ◇ 毎週、成人科を行っています。ぜひご出席ください。  
**10:15～10:50** 地下フェロシップホールにて
- ◇ 受付で出席表に記入し、グループ分けの番号札を引いてから着席ください。
- ◇ 後から来られる方のために、前列への着席にご協力をお願い致します。
- ◇ 「聖書教育」誌の購読をお勧めしています。このテキストと併せて、ぜひお読みください。ご希望の方は事務室までお知らせください。
- ◇ このテキストのボックスへの配布をご希望される方は、担当者（岩崎秀子姉、宇佐美典子姉、郷健人兄）までお知らせください。

ショートメッセージ動画はインターネット上でも視聴できます。

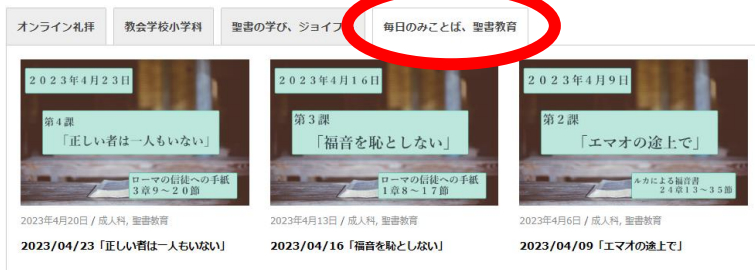
10:15のスタートには間に合わない・・・という方や、お休みされた方、もう一度聞きたいと



教会ホームページを開いて、  
下の方へ進むと・・・

礼拝と教会学校

クリック！



「礼拝と教会学校」というコーナーの  
「毎日のみことば、聖書教育」と書かれた  
ところをクリックしてください。  
直近3週分の動画が表示されるので、  
見たいものをクリックしてください。



こんなページが開きます。  
画像をクリックすると、再生が  
始まります。

## 第14課「天地の創造」

聖書箇所： 創世記1章1～25節

主題聖句： 信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉によって創造され、従って見えるものは、目に見えているものからできたのではないことが分かるのです。(ヘブライ人への手紙11章3節)

今週の聖書教育誌の週題は「天地の創造」です。

旧約聖書の始まりのみ言葉は「**初めに、神は天地を創造された。創世記 1:1**」から私たちに語り告げます。

私は若いころに満天の星空を見あげて、その壮大な美しさに圧倒されつつも、何故か底知れぬ恐れをもったことを忘れることができません。今、自分が目にする星々の輝きは何光年、何十光年というはるか昔に発せられた光が届いている。そして、その星が今、この瞬間に発した光は自分の地上での人生では見ることができない。宇宙全体の悠久の時の流れのなかで何故、自分が今のこの時に命を与えられているのだろうかと思いました。万物の圧倒的な存在の前にかくもちっぽけな自分という存在が、はたして何の意味があるのだろうかと考えた時に、その解がまったくわからないことで不安と恐れをもったのだと振り返って思い起こしています。

一方で毎日の生活は楽しく、愉快であり、充実して希望もある日々を送っていました。これが永遠に続けばどんなに幸せだろうかとも思っていました。しかし、私の10代の人生のなかで三度、突然の悲しい離別を経験しました。小学5年のときにクラスメートが同じ日に二人が”はしか”で亡くなり、同じ日の葬儀にはクラスを半数にわけて参列しました。中学生のときには川で水遊びをしていた時に目の前で溺れて亡くなってしまった子がいました。持っていたタオルをその子にかけてやるのが精いっぱいでした。高校生のときには同級生が学校帰りに彼の自宅前で車にはねられ亡くなりました。葬儀の日に棺のなかの彼の顔を見ることは辛くて出来ませんでした。

どんなに楽しく充実した毎日であっても突然にそれは終わりを迎えることがあることを思い知る辛い体験でした。その私が聖書に出会ったことはそれまで生きてきた人生のなかで最も幸いなことでした。

聖書全巻の冒頭の句にある「**初めに**」ということばにより、すべての初めに存在された神がおられることを私たちは知らされるのです。「旧約聖書入門」を書かれた三浦綾子さんが文中で「**はじめに神は天と地を創造された**」この第一行の言葉を理解できる者は、聖書の全体を理解できる、という言葉聞いたことがある。わたしがはじめてこの第一行目を読んだ時は、それほど重みのある言葉とは知らずに、(神が天地をつくったなんて、本当かしら)と、思ったものだ。・・・まことに漠然とした考えでしかなかった。」

と語っておられます。

「始め」に存在された神こそが空間と時間と歴史の原点であることを知らされ、神とのかかわりにおいてのみ時間と歴史のなかで私たちの存在の意味付けをすることができるのです。そして、神の創造の御業は歴史の始まりであり、それも秩序をもって行われました。「**神は言われた**」創造の御業が「**ことば**」によりひとつひとつが創造されていきました。それはことばを語る人格をもたれる神が生きて働かれることが歴史の事実であることを知らされます。まさに神のことばは創造の源であることがわかります。

## 詩篇 104:24

主よ、御業はいかにおびただしいことか。あなたはすべてを知恵によって成し遂げられた。地はお造りになったものに満ちている。

私たちのまわりの方々のなかには神の存在を否定したり、わからないので考えないようにしているという方が案外おられます。確かに神の前に不完全な私たちが壮大で完全なる神のすべてを認識できるはずありません。

NHKの朝ドラ「らんまん」で植物学者の牧野富太郎博士のドラマが放映されていますが、牧野博士が「雑草という草はない。一つひとつ名があり、そこに生えている意味がある。」と熱く語ります。

すべての創造の御業は私たち人間が誰一人欠けることがなく生きていけるために一つひとつ創造の御業が順序良く、秩序をもっておこなわれています。神が創造されたものには、それぞれに特徴があり、役割を果たすことで世界全体が調和をもって保たれ、一つひとつの存在・命に意味あるものとしてあるということです。

そのように神はことばにより地上のすべての被造物を創造され、それにはすべて神の意思があり、その創造の働きを終えられた時に神は言われたのです。

「**神はこれを見て、良しとされた。**」ここに私は神の創造の真実を知ることができました。

創造の御業は神がご自分の姿に似せてと願われた私たち人間が生きる世界を整えてくださったものであるのです。

## ヨハネによる福音書 1章 1～4節

初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。

この神が与えてくださった被造物社会を私たちが忠実に治めることも神から託されている大きな使命です。けれども人間社会は「私」が中心の社会形成を行ってきた結果、さまざまな環境問題、人権問題、戦争・紛争が起きています。また、人類を何度も破滅できる核兵器も存在しています。私たちの地上での試練は人間の罪の結果であることが多いのです。私たちは神に心から悔い改めて立ち帰らなければなりません。

「**神は天地を創造された。**」の「地」は地球全体を意味していると理解してよいでしょう。全宇宙のなかでは極めて小さく宇宙の中心でもない私たちの世界に神の愛が注がれていることを覚えたいと思います。そして、ここに命を与えられた私たちは主なる神を、ただ「認識」するだけでなく「主なる神を信じる信仰」のなかになりたいと願います。父なる神は御子イエス・キリストと聖霊を私たちのもとに遣わしてくださり、私たちが神の愛のなかに執り成して下さっています。感謝、感謝しかありません。

幼くして地上の命を終えた旧友たちも願わくば主の憐れみのなかにあるようにと思い起こすたびに祈っています。

～分かち合い～

◇ 「あなたがこの地上世界で神の創造の御業だと実感した場所や機会があれば分かち合ってみましょう。

(担当：郷 秀男)



### 7月2日(日) 創世記1章1-25節

1 初めに、神は天地を創造された。2 地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。3 神は言われた。

「光あれ。」

こうして、光があった。4 神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、5 光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。

6 神は言われた。

「水の中に大空あれ。水と水を分けよ。」

7 神は大空を造り、大空の下と大空の上に水を分けさせられた。そのようになった。8 神は大空を天と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第二の日である。

9 神は言われた。

「天の下の水は一つ所に集まれ。乾いた所が現れよ。」

そのようになった。10 神は乾いた所を地と呼び、水の集まった所を海と呼ばれた。神はこれを見て、良しとされた。11 神は言われた。

「地は草を芽生えさせよ。種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける果樹を、地に芽生えさせよ。」

そのようになった。12 地は草を芽生えさせ、それぞれの種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける木を芽生えさせた。神はこれを見て、良しとされた。13 夕べがあり、朝があった。第三の日である。

14 神は言われた。

「天の大空に光る物があって、昼と夜を分け、季節のしるし、日や年のしるしとなれ。15 天の大空に光る物があって、地を照らせ。」

そのようになった。16 神は二つの大きな光る物と星を造り、大きな方に昼を治めさせ、小さな方に夜を治めさせられた。17 神はそれらを天の大空に置いて、地を照らせ、18 昼と夜を治めさせ、光と闇を分けさせられた。神はこれを見て、良しとされた。19 夕べがあり、朝があった。第四の日である。

20 神は言われた。

「生き物が水の中に群がれ。鳥は地の上、天の大空の面を飛べ。」

21 神は水に群がるもの、すなわち大きな怪物、うごめく生き物をそれぞれに、また、翼ある鳥をそれぞれに創造された。神はこれを見て、良しとされた。22 神はそれらのものを祝福して言われた。

「産めよ、増えよ、海の水に満ちよ。鳥は地の上に増えよ。」

23 夕べがあり、朝があった。第五の日である。

24 神は言われた。「地は、それぞれの生き物を産み出せ。家畜、這うもの、地の獣をそれぞれに産み出せ。」

そのようになった。25 神はそれぞれの地の獣、それぞれの家畜、それぞれの土を這うものを造られた。神はこれを見て、良しとされた。

唯一なる神はあらゆるものを、愛を込めて無から創造されました。天と地、太陽、月、星、海など壮大なものも、また顕微鏡で見るような微生物であっても、すべて神の領域に含まれています。神はすべての被造物を正しく管理することを私たち人間に求めておられます。

### 7月3日（月）ヨハネの黙示録2 1章1 - 4節

1 わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなった。2 更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た。3 そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、4 彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のもものは過ぎ去ったからである。」

主イエスを信じるものは『すでに』永遠の命を得ています。『やがて』訪れる永遠の命の完成を待ち望みながら、『すでに』と『やがて』の間の日々を私たちは歩んでいます。『やがて』いつの日か、神はすべての被造物を一新なさる計画があると書いてありますが、その時には顔と顔を合わせて神と相まみえる大いなる希望が待っています。

### 7月4日（火）創世記1章11 - 13節

11 神は言われた。

「地は草を芽生えさせよ。種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける果樹を、地に芽生えさせよ。」

そのようになった。12 地は草を芽生えさせ、それぞれの種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける木を芽生えさせた。神はこれを見て、良しとされた。13 夕べがあり、朝があった。第三の日である。

天地創造のみわざがどんどん進んでいきます。神が創られた美しい世界はすべて「良しとされ」ました。すべての被造物は、たまたま造られたものではなく、神がご計画のうちに祝福をもって造られたものです。植物も動物も繁殖し増えていくように、いのちの源の神の摂理と祝福の中に存在しているのです。

### 7月5日（水）創世記1章31節

神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝があった。第六の日である。

神が完成された天と地のすべてのものは「それは極めてよかった」。理想的な形に仕上がった時点で最後に人間が創造されます。天地創造の時から現在に至るまで、私たちの日常の小さな営みにも、人類の歴史という大きな営みにも、すべてを支配しておられる神のご計画と摂理のみわざがあります。

### 7月6日（木）創世記4 5章3 - 9節

3 ヨセフは、兄弟たちに言った。

「わたしはヨセフです。お父さんはまだ生きておられますか。」

兄弟たちはヨセフの前で驚きのあまり、答えることができなかった。

4 ヨセフは兄弟たちに言った。

「どうか、もっと近寄ってください。」

兄弟たちがそばへ近づくと、ヨセフはまた言った。

「わたしはあなたたちがエジプトへ売った弟のヨセフです。5しかし、今は、わたしをここへ売ったことを悔やんだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのです。6この二年の間、世界中に飢饉が襲っていますが、まだこれから五年間は、耕すこともなく、収穫もないでしょう。7神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのは、この国にあなたたちの残りの者を与え、あなたたちを生き永らえさせて、大いなる救いに至らせるためです。8わたしをここへ遣わしたのは、あなたたちではなく、神です。神がわたしをファラオの顧問、宮廷全体の主、エジプト全国を治める者としてくださったのです。

9 急いで父上のもとへ帰って、伝えてください。『息子のヨセフがこう言っています。神が、わたしを全エジプトの主としてくださいました。ためらわずに、わたしのところへおいでください。

兄たちによって奴隷に売られたヨセフが兄たちを救出するという感動的な箇所です。「私をここへ売ったことを悔やんだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのです。」昔の仕返しをされることを恐れる兄たちをヨセフは赦します。人が悪意を持って行ったことも神さまは良いことに変えることができます。

## 7月7日（金）詩編8編4－10節

4 あなたの天を、あなたの指の業を

わたしは仰ぎます。

月も、星も、あなたが配置なさったもの。

5 そのあなたが御心に留めてくださるとは

人間は何ものなのでしょう。

人の子は何ものなのでしょう

あなたが顧みてくださるとは。

6 神に僅かに劣るものとして人を造り

なお、栄光と威光を冠としていただかせ

7 御手によって造られたものをすべて治めるように

その足もとに置かれました。

8 羊も牛も、野の獣も

9 空の鳥、海の魚、海路を渡るものも。

10 主よ、わたしたちの主よ

あなたの御名は、いかに力強く

全地に満ちていることでしょう。



無限に広がる大空を見上げ、また雄大な大地を見渡して、その豊かさに感銘を受けることがあります。そして人間の存在を思う時、その小ささは一目瞭然です。しかし、神さまはこの世界のすべてをこの小さな人間にお与えになりました。神さまの造られたこの世界を感謝し日々を大切に生きていきましょう。

### 7月8日（土）ローマの信徒への手紙8章18－22節

18 現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りないと思います。19 被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。20 被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持っています。21 つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。22 被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。

戦争、地震、水害、飢餓、貧困など、命が脅かされることが世界中で毎日起こっています。神が創造された完全な世界に罪が入り込み、世界は崩壊しつつありますが、神は平安と希望に満ちた新しい世界をもう一度造られます。主イエスを信じて告白するとき罪が赦され、その新たな神の国へと続く道が私たちには約束されています。

（担当：宇佐美 典子）



## 第15課「創造の完成と安息」

聖書箇所： 創世記1章26～2章4節

主題聖句： 第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なされた。(創世記2章2節)

前回のショートメッセージでも星空、宇宙の話が出てきましたが、私も少し触れたいと思います。やはり、天地創造に思いを馳せると宇宙にまで視線が飛んでしまいますね。

ご紹介したいのは、宇宙物理学者・村山斉（ひとし）先生の言葉です。「Wired.jp」という、各ジャンルの専門家たちが素朴な疑問に分かりやすく答える YouTube の番組で、このような質問に答えておられました。「素粒子物理学の観点から見て、パラレルワールドは存在しますか？」我々の住む宇宙とは別の宇宙がある、というSFでは定番のネタですね。

村山先生いわく「あってもおかしくない、とは言われている。ある説では宇宙は1のあとにゼロを500個並べたくらい存在すると考えられている」のだそうです。なぜそのような説が出るかといえば、「今の宇宙を見てみると、どうもうまく出来過ぎている。これはちょっとあり得ないだろう、と思うくらい出来過ぎている」ので「たくさん作った中でたまたま上手くいったのが私たちのいる宇宙、とする説がある」のだそうです。

学問的なことは私には分かりませんが、このような説が出るほどに神さまの作られた世界は完ぺきなのだな、と感じられ、嬉しくなります。「見よ、それは極めて良かった」(1:31)とは真実なのです。その世界の一員として命を与えられたことは、何たるお恵みでしょうか。

本日の箇所の前半は、人間の創造について語ります。人間創造については1章と2章で2度語られており、創世記の元となった書物が複数あるので別々の話だと捉える読み方と、1章の内容をより詳しく書いたのが2章だと捉える読み方があるそうです。いずれにせよ、どちらも大切な御言葉であり、神さまからのメッセージが込められている、という点を大切にしたいと思います。

神は御自分にかたどって人を創造された。

神にかたどって創造された。

男と女に創造された。(1:27)

これらの言葉から、神さまも人間と同じような姿形なのだろうかと思ったり、神さまは男か女かなどと考えたりすることは、それこそ宇宙の全容を解き明かそうとすることより途方もなく、ほとんど意味のないことに思えます。ただし、2章においては土から作られた人間に「命の息を吹き入れられた」とあるように、他の生き物とは異なる特別さをもって創造されたことは確かでしょう。地上の管理を託されたという意味での特別さは勿論ですが、神を知り、神と交わる存在としての特別さ、も忘れてはいけません。

あらゆる科学の発達は、人から見た神の領域を狭めていくように素人考えでは思います。(実際には、追求すればするほど絶対に人間には立ち入れない領域があることが明らかになるのは、とも思いますが)

そうしたかりそめの発達や、あるいは精神的な墮落を通して、本当に世界中の人間が神との交わりを忘れた時に、管理者としての役目は取り去られるのかもしれませんが。

今日の箇所の後半は、神さまの安息について語られています。

第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なされた。この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なされたので、第七の日を神は祝福し、聖別された。(2:2-3)

これをもって、なるほど神も休まれたのだから人間も労働からの休みが必要だ。だから「7日目」の日曜日は休日なのか。そして平日は忙しいけどせめて休日くらいは礼拝しないといけないから、教会に行くのだな！等と繋げ始めると、もう滅茶苦茶です。ただ比較的最近まで、こうした曖昧な理解を個人的にはしていました。

私たちの教会は「主日」である日曜日に、礼拝をしています。本日は詳しく触れませんが、「主日」と「安息日」は異なるものです。主日を重んじて礼拝日とする意味は分かりますが、安息日については何故そこまで重んじられていたのか、十戒による定めということ以上には理解できていませんでした。

今回の「聖書教育」誌ではこの点に触れ、第七の日とは「神が人間に、神ご自身からさえも解放された自由（意思）を与えられたということの象徴」と語っています。確かに、神ご自身が休まれていた時も、管理者としての人間の務めは存在したことでしょう。無理に喩えるならば神さまは、ずうっと部下の仕事を見張る上司、ではなく、ある程度は本人の裁量に任せる上司、と言えるでしょう。

与えられた自由をどう用いるか、そこに私たちの信仰が表れます。安息日の礼拝であれ、主日の礼拝であれ、私たちは強制されてではなく自らの意思によって主の招きに応え、お捧げしています。そうして神との交わりを保つことが、神によって創造され、神からこの地を託された人間の、最も大切な務めなのです。この世界を「神無き世」としないためにも、それぞれにできる形で主に自らを捧げ、仕えてまいりましょう。

～分かち合い～

◇ 人間が、他の生き物とは区別して創造されたと聖書は語ります。このことからどのような恵みを感じますか。また、このことについて戸惑いや疑問を覚えることがあれば、それも含めて分かち合いましょう。

◇ この地の管理者として、私たちがすべきことについて考え、分かち合いましょう。

(担当：郷 健人)



### 7月9日(日) 創世記1章26-2章4節

26 神は言われた。

「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」

27 神は御自分にかたどって人を創造された。

神にかたどって創造された。

男と女に創造された。

28 神は彼らを祝福して言われた。

「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

29 神は言われた。

「見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる。30 地の獣、空の鳥、地を這うものなど、すべて命あるものにはあらゆる青草を食べさせよう。」

そのようになった。31 神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝があった。第六の日である。

1 天地万物は完成された。2 第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なさった。3 この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なさったので、第七の日を神は祝福し、聖別された。

4 これが天地創造の由来である。

「第七の日を神は祝福し、聖別された。」神さまは、安息されただけでなく、その日を祝福し、聖別されています。その特別な日に礼拝をお捧げするのは勿論、神さまのための日として、喜ばれることをしていきたいですね。

### 7月10日(月) 申命記5章15節

あなたはかつてエジプトの国で奴隷であったが、あなたの神、主が力ある御手と御腕を伸ばしてあなたを導き出されたことを思い起こさねばならない。そのために、あなたの神、主は安息日を守るよう命じられたのである。

神さまを思う時、安息日をも守るよう命じられた。「忙しい」という字は正に心をなくすと書きます。日々の暮らしで雑事に取り組んでいると、神さまのことを忘れてしまう時があります。そういう事も神さまはご存じなので、しっかり神さまと向き合う日を用意してくれたのだと思います。

### 7月11日(火) ペトロの手紙一4章10節

あなたがたはそれぞれ、賜物を授かっているのですから、神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を生かして互いに仕えなさい。

「恵みの善い管理者」、与えられた恵みを把握し、その意図を理解して、その賜物を生かした働きをすれば、神さまは喜んで下さるのではないのでしょうか。まずは「数えてみよ主の恵み」ですね。

## 7月12日(水) ヨハネによる福音書20章26-29節

26 さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。27 それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」28 トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。29 イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」

「戸にはみな鍵がかけてあった」、この状況の中、お弟子さん達は裏切りや密告を恐れて疑心暗鬼になっていたのだと思います。それも含めての「信じる者になりなさい」なのではないでしょうか。主を信じて歩む者になりたいですね。

## 7月13日(木) 申命記8章2-3節

2 あなたの神、主が導かれたこの四十年の荒れ野の旅を思い起こしなさい。こうして主はあなたを苦しめて試し、あなたの心にあること、すなわち御自分の戒めを守るかどうかを知ろうとされた。3 主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった。

「40年」という時が人と神さまの時間の感覚の違いだと感じます。神さまがそれだけの期間をご計画された程に人の心は頑<sup>かたく</sup>なのかもしれません。

## 7月14日(金) ヨハネによる福音書1章1-5節

1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。2 この言は、初めに神と共にあった。3 万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。4 言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。5 光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

「言(ことば)」とは?となりますが、このあと14節でこう記されています。

「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」

## 7月15日(土) コリントの信徒への手紙一15章42-49節

42 死者の復活もこれと同じです。蒔かれるときは朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、43 蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです。44 つまり、自然の命の体が蒔かれて、霊の体が復活するのです。自然の命の体があるのですから、霊の体もあるわけです。45 「最初の人アダムは命のある生き物となった」と書いてありますが、最後のアダムは命を与える霊となったのです。46 最初に霊の体があったのではありません。自然の命の体があり、次いで霊の体があるのです。47 最初の人土ででき、地に属する者であり、第二の人は天に属する者です。48 土からできた者たちはすべて、土からできたその人に等しく、天に属する者たちはすべて、天に属するその人に等しいのです。49 わたしたちは、土からできたその人の似姿となっているように、天に属するその人の似姿にもなるのです。

「最後のアダムは命を与える霊となった」、アダムから始まった人の数々の罪はイエスさまの流された血によって帳消しにされ、永遠の命を頂けるようになったことを意味しているのだと思います。

(担当: 栗山 義亜)

## 第16課「生きる者となる」

聖書箇所： 創世記2章4～17節

主題聖句： 「どこにいるのか。」(創世記3章9節)

旧約聖書を開くと最初に書かれているのが創世記です。

「創世記」「出エジプト記」「レビ記」「民数記」「申命記」と続きますが、この五つを総称して『モーセ五書』と言います。ユダヤ教ではトーラー（律法）と呼ばれています。

いつ、だれが、どのように編集したのかを知り得る外的資料は存在しないと言われていました。口頭伝承が文書化され、諸法典とともに、祭司的編集者たちによって編集を重ね、現在の五書の形態になったと考えられています。

創世記は主に、「ヤハウィスト資料文書」「エロヒスト資料文書」「祭司文書」から構成されていると言われていました。1章の創造物語、2から3章の楽園物語を通して、それぞれの文書が文脈上で新しいさまざまな解釈の可能性を生み出し、多彩な性格のものへと変化していきました。祭司的編集者たちの編集作業によって完成し、正典とされた文書は、現代人の論理的思考や感性においては、矛盾、不可解、奇妙にも見える表現や内容であるのは当然であると思われると思います。

しかし、だからこそそこには、現代人が見失っているかもしれない古代の人々の経験に裏打ちされた知恵や、神への恐れ、神への正義・・・を、神の声を聴きつつ解釈することができるかもしれません。

今回の聖書箇所は、1章からの続きである「天地万物は完成された。」という1節の言葉から始まります。「創造物語」から続く「楽園物語」への最初の部分が今回の聖書箇所となりますが、その内容を丁寧に読んでいく時、私たちの感性に響くものがあるかもしれません。

2章では、人、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくりします。

1節の「万物」とは、元来「天の軍勢、星、天使」を指します。2節の「第七の日に、神は御自分の仕事を完成され」は「神は第七の日には創造の仕事を完成していた」という意味です。「安息」は「止める、休む」が原意ですが、単に休むという意味とは聖別されています。「聖別」とは神聖な用にあてるための物、または人を一般的・世俗的使用から区別して特別なものとする、という意味になります。

4節の「これが天地創造の由来である。」はここまでの話と、これから後の物語への導入のための繋ぎの「結合文」としての性格をもたせて編集されたと考えられています。つまり、続く「主なる神が地と天を造られたとき」では、「地と天」という書き方になっているからです。

このことにより、これから後の物語が「地」を中心に書かれることを暗示しています。

5節では、創造以前の地上の様子と、「主なる神が地上に雨をお送りにならなかったからである。」という理由が書かれており、乾燥した生き物の存在しない荒地のイメージが提示されています。

6節の「地下」は、「泉、霧、洪水、川」とも訳されますが、ここで用いられている原語はシュメール語の「地下の大洋から溢れ出てくる水」に由来する言葉であろうと言われていいます。

7節の「塵」とは非常に細かい赤い土を表し、その土で「形づくる」という陶器師が粘土をこねて形を整えて造っていくイメージの表現となっています。

「その鼻に命の息を吹き入れられた。」は、普遍的な命を支える力である神の息吹です。死ぬ時には取り去られると考えられていました。「生きる者」は、ヨブ記34章14節～15節に「もし神が御自分にのみ、御心を留め、その霊と息吹を御自分に集められるなら、生きとし生けるものは直ちに息絶え、人間も塵に返るだろう。」とあるように、尊くも神の息吹を授けていただけることで「息をしながら生きる者」と変えられますね。

バプテスマを受けてクリスチャンになっても、昨日までの自分と何も変わらない・・・そんな経験をされた方もいらっしゃるかと思います。私も、そんな中の一人です。「生きる者とされた」「命の息吹を吹き入れられた」と心から実感したのは21年後のことです。一人ひとりへの神のそのご計画は、計り知れないものですね。

9節の「見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらすあらゆる木」とは、「美しい形をした、おいしい実のなる木」という意味になります。そして、神の園の木については、エゼキエル書31章8節～18節に詳しく書かれていますので、ご一読いただければと思います。続く「命の木」ですが、命の木の果実を食べると、不死の命を与えられるという考えは古代世界の神話においては広く語られていますが、旧約においては、創世記3章22節の「命の木からも取って食べ、永遠に

生きる者となるおそれがある。」、箴言 3 章 18 節「彼女をとらえる人には、命の木となり保つ人は幸いを得る。」、箴言 11 章 30 節「神に従う人の結ぶ実は命の木となる。」、箴言 13 章 12 節「かなえられた望みは命の木。」、箴言 15 章 4 節「癒しをもたらず舌は命の木。」と記され、「園の中央にある木」とは神さまの存在を表しており、目に見える形で旧約の神がその御姿を表して下さっているのかもしれませんが。

そして同じ 9 節の「善悪の知識の木」の善悪の知識とは、精神的・道徳的判断能力のことだけではなく、ここでの「善悪」は「すべて」と対になる言葉の意味を有しており、「知る」は「できる」に通じていることから、「善悪を知る」は「全知全能」となり、すなわち「神」ということになります。17 節で「ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。」とあり、3 章 3 節には「触れてもいけない。」とあります。神さまの命じに背くことで、人に「罪」の意識が芽生える物語へ続くことが示唆されます。

15 節によると、エデンの園も、全く働く必要のない「楽園」ではなく、「耕し、守る」必要があったと書かれています。これは、神が被造物を支配することの一つとして考えることができるということです。後に、エデンの園を「守る」のは「ケルビムときらめく剣の炎」となります。(3 章 24 節)

17 節で「善悪の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」とあります。9 節のところで書かせていただきましたが、「善悪の知識」とは「全知全能の神」のことであり、「死んでしまう」というのはここでは、肉体的死ではなく霊的な死であると思われます。神に対する不従順な行いに対する罰であり、全知全能の神に近づこうとした罪のために与えられた霊的死は、神との断絶でもあり、罪を犯すことの重大さを知ることとなります。そして、「命の木」の実を取って食べることは、永遠の命を生きる者となるおそれがあるということ(3 章 22 節)、神に近づこうとする人間の罪であり、3 章 22 節～23 節にあるように、エデンの園を追放されてしまいます。

今回の聖書箇所 2 章の初めで天地創造の完成が語られ、続いて人がどのように誕生するのが語られます。

私たちはこの創造物語に、どのように向かい合っていけばよいと皆さまは思われますか。ある「創世記を読む会」というセミナーに参加した時、あまりにもいろいろな意見が飛び交い驚かされました。聖書を読む時、正解も不正解もないと思いますが、聖書に書かれている御言葉を、飛躍し過ぎる内容に解釈したり、神さまの示された御業を否定するような解釈をすることは、私はすべきでないと思います。

現代における論理的思考や感性では理解し難い御言葉であったとしても、神への畏れを抱くことの大切さ、そして神への正義について聖書は語っています。御国を追われた罪としての試練でさえも、神さまが与えてくださる祝福として捉えることもできるのではないかと思います。見捨てることなく御手を差し伸べてくださる主に、すべてをおゆだねする信仰の道を歩むことが大切であると思わされます。その時、「どこにいるのか。」という問いかけに素直に応答できるかもしれません。

～分かち合い～

☆ 聖別された安息日の過ごし方について分かち合ってみましょう。

(担当：岩崎 秀子)

\* 「エデン」とは元来地名ではなく、「ステップ地帯」を表す言葉であったと言われています。ステップ地帯とは平らな乾燥した土地ですが、ここの聖書箇所の意味合いは、13 章 10 節の「主の園のように、エジプトの国のように、見渡す限りよく潤っていた。」とあるように、ヘブライ語での「喜び、楽しみ」と関連付けて「水が豊かにあるところ」という「オアシス」＝「神の園」を意味し、荒れ野の中のオアシス的イメージで理解されているのだろうと思われます。そしてその「神の園」に、土地の塵で形づくった人間を置かれたとあります。

\* 10 節～14 節は、エデンの園を説明するために後から付加された部分と考えられています。エデンの豊かな川を源として、四方の世界(全世界)を潤す生命線となる四本の大河が流れ出ると記されます。しかし、エデンがどこに存在していたかを特定するのは難しく、11 節の「ピシオン」は不明とされており、「ハビラ」は「アラビア」を表し、13 節の「ギホン」は不明、「クシュ」は現在のエチオピアとスーダンの一部を含むエジプトの南の地域であり、14 節の「アシュール」はアッシリアの古都アッシュールであると言われています。ここでの記事から、エデンの園はメソポタミアの北方遠くの山岳地帯と推測できるとのことです。



### 7月16日(日) 創世記2章14節-17節

主なる神が地と天を造られたとき、5地上にはまだ野の木も、野の草も生えていなかった。主なる神が地上に雨をお送りにならなかったからである。また土を耕す人もいなかった。

6しかし、水が地下から湧き出て、土の面をすべて潤した。7主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。8主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた。9主なる神は、見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらしあらゆる木を地に生えいさせ、また園の中央には、命の木と善悪の知識の木を生えいさせられた。

10エデンから一つの川が流れ出ていた。園を潤し、そこで分かれて、四つの川となっていた。11第一の川の名はピションで、金を産出するハビラ地方全域を巡っていた。12その金は良質であり、そこではまた、琥珀の類やラピス・ラズリも産出した。13第二の川の名はギホンで、クシュ地方全域を巡っていた。14第三の川の名はチグリスで、アシュルの東の方を流れており、第四の川はユーフラテスであった。

15主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住ませ、人がそこを耕し、守るようにされた。16主なる神は人に命じて言われた。

「園のすべての木から取って食べなさい。17ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」

エデンの園は「主なる神は、見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらしあらゆる木を地に生えいさせ、またその中央には、・・・。」(2:9) 命の息を吹き入れられた人は、エデンの園に置かれ、人がそこを耕し守るようにされました。善悪の知識の木以外の全ての木からとって食べても良かったのです。全てのことが許されている私たちも、命と平安を失うことが無いように、何を一番大切にすべきなのか、いつも主のお導きに従って歩みたいです。

### 7月17日(月) 申命記28章1-14節

1もし、あなたがあなたの神、主の御声によく聞き従い、今日わたしが命じる戒めをことごとく忠実に守るならば、あなたの神、主は、あなたを地上のあらゆる国民にはるかにまさったものとしてくださる。2あなたがあなたの神、主の御声に聞き従うならば、これらの祝福はすべてあなたに臨み、実現するであろう。3あなたは町にいても祝福され、野にいても祝福される。4あなたの身から生まれる子も土地の実りも、家畜の産むもの、すなわち牛の子や羊の子も祝福され、5籠もこね鉢も祝福される。6あなたは入るときも祝福され、出て行くときも祝福される。7主は、あなたに立ち向かう敵を目の前で撃ち破られる。敵は一つの道から攻めて来るが、あなたの前に敗れて七つの道に逃げ去る。8主は、あなたのために、あなたの穀倉に対しても、あなたの手の働きすべてに対しても祝福を定められ、あなたの神、主が与えられる土地であなたを祝福される。9もし、あなたがあなたの神、主の戒めを守り、その道に従って歩むならば、主はお誓いになったとおり、あなたを聖なる民とされる。10地上のすべての民は、あなたに主の御名が付けられるのを見て、あなたに畏れを抱く。11主は、あなたに与えると先祖に誓われた土地で、あなたの身から生まれる子、家畜の産むもの、土地の実りを豊かに増し加え、12恵みの倉である天を開いて、季節ごとにあなたの土地に雨を降らせ、あなたの手の業すべてを祝福される。あなたはそれゆえ、多くの国民に貸すようになるが、あなたが貸してもらったことはないであろう。13わたしが今日、忠実に守るように命じるあなたの神、主の戒めにあなたが聞き従うならば、主はあなたを頭とし、決して尾とはされない。あなたは常に上に立ち、



決して下になることはないであろう。14 あなたは、今日わたしが命じるすべての言葉から離れて左右にそれ、他の神々に従い仕えてはならない。

主のみ声に聞き従い、戒めを忠実に守るならば、当人達が町にいても野にいても祝福されるだけで無く、生まれる子供も土地に実るものも、家畜の生むものまで祝福し、敵との戦いの中にあっても祝福する。このようにお互いに主の祝福を確認しあって、共に主に従うことの大切さを胸に過ごされていたのでしょうか。主に従う者への主の憐れみ、祝福の大きさに驚かされます。

### 7月18日(火) ヨハネによる福音書2章1-11節

1 三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があって、イエスの母がそこにいた。2 イエスも、その弟子たちも婚礼に招かれた。3 ぶどう酒が足りなくなったので、母がイエスに、「ぶどう酒がなくなりました」と言った。4 イエスは母に言われた。「婦人よ、わたしとどんなかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません。」5 しかし、母は召し使いたちに、「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と言った。6 そこには、ユダヤ人が清めに用いる石の水がめが六つ置いてあった。いずれも二ないし三メートル入りのものである。7 イエスが、「水がめに水をいっぱい入れなさい」と言われると、召し使いたちは、かめの縁まで水を満たした。8 イエスは、「さあ、それを飲んで宴会の世話役のところへ持って行きなさい」と言われた。召し使いたちは運んで行った。9 世話役はぶどう酒に変わった水の味見をした。このぶどう酒がどこから来たのか、水をくんだ召し使いたちは知っていたが、世話役は知らなかった。10 花婿を呼んで、11 言った。「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわったところに劣ったものを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました。」11 イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。

「ぶどう酒が無い！」マリアさんの窮乏の言葉によって、イエスさまの時が暗示されるのが神さまのご計画でしたのでしょうか。水がめの水はユダヤ人のきよめの儀式に使われ瓶六つ(6節a)と言う不完全数です。律法主義的なユダヤ教の不完全性を示し、それがぶどう酒(いのちと力を与えて「人の心を喜ばせる」詩篇)に変えられます。母の関心を超えて、人類の救いのために流されるイエスさまの血潮を示されます。私達の救いの目的で生まれて下さったイエスさまを思うと辛いですが、感謝申し上げます。

### 7月19日(水) マタイによる福音書4章1-11節

1 さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、「霊」に導かれて荒れ野に行かれた。2 そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。3 すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」4 イエスはお答えになった。

『人はパンだけで生きるものではない。

神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』

と書いてある。」5 次に、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて、6 言った。「神の子なら、飛び降りたらどうだ。

『神があなたのために天使たちに命じると、

あなたの足が石に打ち当たることのないように、

天使たちは手であなたを支える』

と書いてある。」7 イエスは、『あなたの神である主を試してはならない』とも書いてある」と言われた。8 更に、悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せて、9 「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」と言った。10 すると、イエスは言われた。「退け、サタン。」

『あなたの神である主を拝み、  
ただ主に仕えよ』

と書いてある。」 11そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使たちが来てイエスに仕えた。

空腹を満たす、保身、権威欲、人が根本に持つ欲求への誘惑をイエスさまは一つ一つみ言葉によって避けられました。空腹により食べ物のために長子の権利さえ譲ってしまう私達(エソウ)の本性とはかけ離れた、イエスさまの的確なみ言葉による応答に神さまの知恵を思います。「頭の上を鳥(誘惑)が飛ぶのは避けられないが、頭に巣を作る(誘惑に陥る)のは避けられる。」と学びました。誘惑が来ても陥らない聡い知恵が主によって小さな私達にも与えられます様にと切に願います。

### 7月20日(木) コヘトの言葉4章9-12節

9ひとりよりもふたりが良い。

共に労苦すれば、その報いは良い。

10倒れれば、ひとりがその友を助け起こす。

倒れても起こしてくれる友のない人は不幸だ。

11更に、ふたりで寝れば暖かいが

ひとりでどうして暖まれようか。

12ひとりが攻められれば、ふたりでこれに対する。

三つよりの糸は切れにくい。

胸が痛みます。私達はいつも変わらず愛して下さる神さまを知り信じる事が許され、礼拝堂に共に集い語りあい祈りあうことも許されています。今イエスさまを知らない多くの孤独な方々がおられます。中々み言葉が上手く届かず、拒否されてしまうこともあります。信じていてもご高齢になりネットも使えず、遠方故会堂に来ることの出来ない方々もおられます。主よ、ご聖霊をお一人お一人に豊かに送り続けて下さいます様に、又お祈りと共に私達のなすべきことをお示し下さい。

### 7月21日(金) 使徒言行録10章17-33節

17ペトロが、今見た幻はいったい何だろうかと、ひとりで思案に暮れていると、コルネリウスから差し向けられた人々が、シモンの家を探し当てて門口に立ち、18声をかけて、「ペトロと呼ばれるシモンという方が、ここに泊まっておられますか」と尋ねた。19ペトロがなおも幻について考え込んでいると、「霊」がこう言った。「三人の者があなたを探しに来ている。20立って下に行き、ためらわないで一緒に出発しなさい。わたしがあの者たちをよこしたのだ。」21ペトロは、その人々のところへ降りて行って、「あなたがたが探しているのは、このわたしです。どうして、ここへ来られたのですか」と言った。22すると、彼らは言った。「百人隊長のコルネリウスは、正しい人で神を畏れ、すべてのユダヤ人に評判の良い人ですが、あなたを家に招いて話を聞くようにと、聖なる天使からお告げを受けたのです。」23それで、ペトロはその人たちを迎え入れ、泊ませた。

翌日、ペトロはそこをたち、彼らと出かけた。ヤッファの兄弟も何人か一緒に行った。24次の日、一行はカイサリアに到着した。コルネリウスは親類や親しい友人を呼び集めて待っていた。25ペトロが来ると、コルネリウスは迎えに出て、足もとにひれ伏して拝んだ。26ペトロは彼を起こして言った。「お立ちください。わたしもただの人間です。」27そして、話しながら家に入ってみると、大勢の人が集まっていたので、28彼らに言った。「あなたがたもご存じのとおり、ユダヤ人が外国人と交際したり、外国人を訪問したりすることは、律法で禁じられています。けれども、神はわたしに、どんな人をも清くない者とか、汚れている者とか言ってはならないと、お示しになりました。29それで、お招きを受けたとき、すぐ来たのです。お尋ねしますが、なぜ招いてくださったのですか。」30すると、コルネリウスが言った。「四日前の今ごろのことです。わたしが家で午後三時の祈りをして

いますと、輝く服を着た人がわたしの前に立って、<sup>31</sup> 言うのです。『コルネリウス、あなたの祈りは聞き入れられ、あなたの施しは神の前で覚えられた。<sup>32</sup> ヤッフアに人を送って、ペトロと呼ばれるシモンを招きなさい。その人は、海岸にある皮なめし職人シモンの家に泊まっている。』<sup>33</sup> それで、早速あなたのところに人を送ったのです。よくおいでくださいました。今わたしたちは皆、主があなたにお命じになったことを残らず聞こうとして、神の前にいるのです。』

幻によってコルネリウスはペトロを招くように、ペトロには外国人を阻害しないように神さまに示されました(1~16節)。その後コルネリウスは示されたように家にペトロを招き、彼も主のお導きと納得して招きに応えて向かいます。大勢の人がいて、イエスさまの救いを証しすると一同の上に聖霊が下り信じる者となりました(44節)私達もまだ見ぬその先に主の栄光とみ業が現されることを信じて、耳を澄ませて主が語って下さるみ声を聞き、お導きに従う者でありたいです。

### 7月22日(土) ローマの信徒への手紙一 12章1-8節

1 こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。<sup>2</sup> あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにしてお自分を改めていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なものであるかをわきまえるようになりなさい。<sup>3</sup> わたしに与えられた恵みによって、あなたがた一人一人に言います。自分を過大に評価してはなりません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の度合いに応じて慎み深く評価すべきです。<sup>4</sup> というのは、わたしたちの一つの体は多くの部分から成り立っていても、すべての部分が同じ働きをしていないように、<sup>5</sup> わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのです。<sup>6</sup> わたしたちは、与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っていますから、預言の賜物を受けていれば、信仰に応じて預言し、<sup>7</sup> 奉仕の賜物を受けていれば、奉仕に専念しなさい。また、教える人は教えに、<sup>8</sup> 勧める人は勧めに精を出しなさい。施しをする人は惜しまず施し、指導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は快く行いなさい。

神さまを信じてから学ばされたことに、自分を卑下せず、傲慢にならず、ありのままを評価して受け止めることがあります。主に贖われ、時を経た今少しずつ出来るようになってきたか(?)と思います。心を吟味する中で、自分の賜物についても考えさせられます。其々が主にいただいた賜物を発揮してご奉仕している姿にいつも励まされます。陰には忍耐と弛まぬお祈りがあるでしょうが、それに勝るご聖霊の喜びがあり主の栄光へと変えられていくことを信じて感謝いたします。

(担当：渡部 和子)

## 第17課「応え合う者として」

聖書箇所： 創世記2章18～25節

主題聖句： 主なる神は言われた。「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」(創世記2章18節)

私たちは今月より創世記を読み進めています。天地が創造され、生き物が生み出され、神さまに似せて人が造られました。先週学んだ2章の前半では、人に焦点が当てられ、主がどのように人を創造されたかが書かれています。1章27節において、「男と女に創造された」と書かれています。本日の聖書箇所では、そのことが詳しく書かれています。

天地を造り、植物を芽生えさせ、動物を増やし、人を造り出した主は、それらをご覧になって、すべて良しとされました。2章18節で初めて「良くない」という表現が出てきますが、これは、主のお造りになったものが良くなかった、失敗だったという意味ではありません。主は、初めから、人を独りで生きていくものとしてお造りになったのではなく、他者と向き合い、共に生きるものとして創造されたのです。

主は、あらゆる獣、あらゆる鳥を土で形作り、人のところへ持ってきて、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった。(2:19)

主は、主ご自身が造られた獣や鳥にご自身で名前をつけず、人に名前をつけさせました。それは、獣や鳥にはない知恵を人にはお与えになったからです。名をつけるには、そのものをよく観察し、特徴を捉え、ふさわしい名を考えなければなりません。主は人を信頼して、任せてくださったのです。

そして、「人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった」とありますから、人がつけた名前を主は認めてくださったということです。

子がすることを親がほほえましく見守っているような、主の優しいまなざしを感じます。

しかし、人は、「自分に合う助ける者」を見つけることができませんでした。人も動物も、同じ神の被造物—生きるものであり、その命の尊さは変わりませんが、人は、他の動物とは違って、特別に「命の息」が主により直接吹き込まれ、神さまに似せて創造された存在、神と交わることのできる存在なので、そうではない他の動物を人の助け手にすることはできなかったのでしょうか。

この「自分に合う助ける者」という言葉は、「エーゼル・ゲネグドー」というヘブライ語を訳したものです。この「エーゼル」という言葉には「同伴者」という意味があります。「助手」「アシスタント」という意味に誤って解釈され、「女性は男性を補助するもの」「男性が優位で、女性は男性に従属するもの」と誤解されることが多くありますが、決してそうではありません。そして、「ゲネグドー」の「ネグド」は「向かい合う」という意味です。もともとは「目の前に置く」「反対側にセットする」という意味で、「意見を言う」「話す」という動詞にも由来しています。

つまり、主が、アダムのために造り上げた「男にふさわしい助け手」というのは、文句も言わずに3歩下がってついてくるような女性ではなく、男性と向かい合ってしっかりと立ち、意見を言い、補い合い、助け合う存在だったのです。

しかし、気をつけなければならないのは、何でも文句を言ってよいという意味ではないということです。お互いを尊重し、祈りあい、ともに主を見上げて歩んでいく関係を築くのです。

主は、なぜ、頭の骨でも足の骨でもなく、あばら骨の一部を抜き取って女を造られたのでしょうか？

誤訳であるという考え方もあるようですが、フィンランドの宣教師で、西日本福音ルーテル教会や神戸ルーテル聖書学院等での働きに従事されたマイリス・ヤナツイネンは次のように述べています。

なぜ神は女性を男性のあばら骨から造られたのであろうか。もし男性の頭から女性を創造したなら、女性が男性を支配したかもしれない。また、もし女性を男性の足から造ったなら、女性は男性の奴隷になっていたかもしれない。しかし、神は女性に男性の仲間になってほしかったし、男性と同等であってほしかった。だからこそ、男性のあばら骨から創造されたのだ。あばら骨は心臓に一番近いところにある。つまり、男性と女性は一体であり、「あなたは私です」と互いに言うことができる。

男（イシュ）は女を「イシャー」と呼びます。「イシュ」に「ハー（神の息）」が吹き込まれたものという意味です。

男と女は、初めから別々に造られた別々の存在ではなく、もともと一つであり、どちらも神に造られたものであるのです。1つのものであった男女が、二つに分かれて、再び結ばれ、対等であり、お互いを大切にし、補い合い、助け合う存在となったのです。

こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。（2:24）

これは主が示してくださった結婚の奥義で、このみ言葉はエフェソ5章31節にも引用されています。

「父母を離れて」とあるように、二人とも独立して、きちんと自分の足で立っていなければなりません。未熟で、一人では立ってられないから、結ばれるのではなく、自立した二人が、お互いを良き助け手として受け入れて共に歩むとき、その歩みは祝福され、豊かなものとなるのです。

これは、男女の関係に留まるものではなく、あらゆる人間同士の関係性について、語られていることだと思います。相手を大切に思い、仕え、その身をささげ、敬い、愛し合う関係…それは、人間同士だけでなく、キリストと教会の関係でもあります。夫婦や恋人同士、家族、友人、職場…教会の中であっても、人間関係には様々な問題がつきものです。こんなに面倒なら一人の方がずっと楽だと思えることもあるでしょう。しかし、主は、「独りでいるのは良くない」と助ける者を造ってくださったのです。

愛し合い、いたわり合い、尊敬し合い、仕え合う時、そこには神さまが望んで、私たちに与えてくださった豊かな関係性が生まれるのです。

～分かち合い～

☆ 周囲の人々とどのような関係を持っていきたいですか？

☆ 先入観や社会通念に邪魔をされて、聖書を正しく読めなかった経験はありますか？

（担当：田中 由記子）

## 7/23-29 今週の聖書日課



### 7月23日(日) 創世記2章18-25節

18 主なる神は言われた。

「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」

19 主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった。20 人はあらゆる家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名を付けたが、自分に合う助ける者は見つけることができなかった。

21 主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。22 そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。主なる神が彼女を人のところへ連れて来られると、23 人は言った。

「ついに、これこそ

わたしの骨の骨

わたしの肉の肉。これをこそ、女（イシャー）と呼ぼう

まさに、男（イシュ）から取られたものだから。」

24 こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。

25 人と妻は二人とも裸であったが、恥ずかしがりはしなかった。

夫婦はお互いに理解しあい助けあいましょう。歳をとったらお互いにいたわり合いましょう。どちらかが先に天国に召されても、イエスさまと一緒にいつも見守ってくれています。ありがとう。天国でまたあいましょうね。

### 7月24日(月) マタイによる福音書7章12節

だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である。」

「人にしてもらいたいことは、あなた方も人にしなさい」その人のことを思いなさい。その人のことを祈りなさい。その人と共に喜びなさい。その人と共に悲しみなさい。自分のことのようにその人を愛しなさい。その人はきっとあなたのことを好きになってくださいます。

### 7月25日(火) ローマの信徒への手紙14章1-9節

1 信仰の弱い人を受け入れなさい。その考えを批判してはなりません。2 何を食べてもよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜だけを食べているのです。3 食べる人は、食べない人を軽蔑してはならないし、また、食べない人は、食べる人を裁いてはなりません。神はこのような人をも受け入れられたからです。4 他人の召し使いを裁くとは、いったいあなたは何者ですか。召し使いが立つのも倒れるのも、その主人によるのです。しかし、召し使いは立ちます。主は、その人を立たせることができになるからです。5 ある日を他の日よりも尊ぶ人もいれば、すべての日を同じように考える人もいます。それは、各自が自分の心の確信に基づいて決めるべきことです。6 特定の日を重んじる人は主のために重んじる。食べる人は主のために食べる。神に感謝しているからです。また、食べない人も、主のために食べない。そして、神に感謝しているのです。7 わたしたちの中には、だれ一人自分のために生きる人はなく、だれ一人自分のために死ぬ人もいません。8 わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです。9 キリストが死に、そして生きたのは、死んだ人にも生きていられる人にも主となられるためです。

「生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです」パウロはすばらしいです。私の信仰の弱さを感じます。「~のために」は良い言葉ですね。ささやかですが、私を支えて下さる人々に(~のために)、毎日感謝とご健康をお祈りしています。

## 7月26日(水) マタイによる福音書18章20節

二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」

「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、私もその中にいるのである」礼拝、祈禱会、役員会、執事会、勉強会、会堂清掃等…、イエスさまはその中にいつもおられます。一人一人に「頑張りなさい」と励ましてくださっています。

## 7月27日(木) ヤコブの手紙1章12-15節

12 試練を耐え忍ぶ人は幸いです。その人は適格者と認められ、神を愛する人々に約束された命の冠をいただくからです。13 誘惑に遭うとき、だれも、「神に誘惑されている」と言ってはなりません。神は、悪の誘惑を受けるような方ではなく、また、御自分でも人を誘惑したりなさらないからです。14 むしろ、人はそれぞれ、自分自身の欲望に引かれ、唆されて、誘惑に陥るのです。15 そして、欲望ははらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます。

「自分自身の欲望に引かれ、そそのかされて、誘惑に陥るのです」まさにその通りです。自分の心にはサタンがいます。誰も見ていないよ。少しぐらいなら大丈夫だよ。我慢することはないよ。…そして、後で後悔をするのです。サタンが笑っています。あやまちを繰り返す自分が情けないです。でも、そんな私でも主は共にいて見守ってくださっています。感謝致します。

## 7月28日(金) ヨハネによる福音書16章31-33節

31 イエスはお答えになった。「今ようやく、信じるようになったのか。32 だが、あなたがたが散らされて自分の家に帰ってしまい、わたしをひとりきりにする時が来る。いや、既に来ている。しかし、わたしはひとりではない。父が、共にいてくださるからだ。33 これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」

「あなたがたには世で苦難がある。しかし勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」なんと力強い励ましでしょう。恐れることはないのです。その苦難に立ち向かいましょう。私は一人ではない。イエスさまが共にいて下さる。イエスさま感謝致します。

## 7月29日(土) ルカによる福音書15章11-24節

11 また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。12 弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。13 何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄遣いしてしまった。14 何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。15 それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話をさせた。16 彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人はだれもいなかった。17 そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしようだ。18 ここをたち、父のところに行って言おう。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。19 もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください』と。』20 そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。21 息子は言った。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』22 しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。23 それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。24 この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。

「わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」食べ物をくれる人は誰もいなかった。どん底に落ちて、はじめて今までのありがたさに気がつくのですね。主よ、あなたの愛に感謝致します。

(担当：小沢 敬一)

## 第18課「それでもなお、生きる者として」

聖書箇所： 創世記3章1～24節

主題聖句： 主なる神はアダムを呼ばれた。「どこにいるのか。」(創世記3章9節)

神さまは天地創造の最後に人を創造されました。最初の人を「アダム」と呼びますが、もともと「アダム」とはヘブライ語で「人・人類」を意味する言葉です。創世記2章16-17節において、神はアダムにエデンの園の中央にある「善悪の知識の木」の実を食べてはいけないという約束を与えています。この時点ではエバ(女)は、まだ創造されていません。

本日の聖書箇所です。最初に登場するのはヘビです。神が創造された野の生き物の中で最も賢かったと記されています。ところで、ヘビがしゃべるのでしょうか？これはヘビを代わりに用いて人を誘惑しようとするサタンの手口で、自分の正体は隠して人に近づいてきます。ヘビは賢さゆえに恰好の隠れ蓑になってしまったのです。サタンについてはエゼキエル書28章11-19節に記述があり、たくさんの宝石が体を覆い、知恵に満ち美の極みであり、最高位の天使だったが天の聖所を罪によって汚したためサタンへと墮落したことがわかります。

ヘビが女に話しかけるシーンです。想像してみてください。もし近づいてくるものが、醜い姿をしていて、全く好ましくない姿の者だったら、私たちは警戒して逃げ出すと思いませんか。美しい姿で近づき、今よりさらに良くなる、幸せになると思い込ませてしまう、神を熟知しているサタンの巧妙さがよくわかります。人を惑わせる言葉を使うというやり方はサタンの常套手段です。イエスさまが荒野で40日間の断食と祈りをされているときにも、サタンは言葉巧みに誘惑を試み、しかしイエスさまはサタンに打ち勝たれたとマタイによる福音書3章に記されています。

ヘビは、神との約束を直接聞いていない女に、神の命令の絶対性を疑わせ、善悪の知識の木の実を取って食べるよう仕向けます。知的で物分かりのよさそうな態度で、神が本当にそうだったのかどうか疑いの種をまきます。この時、アダムはどこにいたのでしょうか。そもそも食べてはいけないという約束はアダムに与えられたものです。アダムは家にいて女の帰りを待っていたのでしょうか？いいえ、そこに一緒にいたのです。(3章6節) ヘビが誘惑する様子を一部始終見ていたのに、それを止めることができなかった、神との約束を破ったアダムの罪は大変大きいと言えます。

さて、二人には、その木の実はいへんおいしそうで、目には美しく、賢くなれそうに見えたので、女は誘惑に負け、取って食べ、男にも渡したので彼も食べました。すると二人の目が開け、見えるべきものが見えるようになり、自分たちが裸であることを知り、いちじくの葉を綴りあわせて腰を覆いました。ヘビが言った「目が開けて神のようになる」のではなく、神との約束を破ったことと引き換えに、互いに向き合い助け合う関係から、互いに裸であることを恥じながら自分を隠して生きる関係になってしまったのです。

神が園を歩く音が聞こえたとき、アダムと女は木の間に隠れます。約束を破ったことで後ろめたくて神の前に立てず、神と向き合えませんでした。御顔を避けて隠れるということは神との関係の断絶を意味します。憐れみ深い神は隠れていることをご存じの上で、「どこにいるのか」とアダムを呼ばれます。神との関係回復と悔い改める機会を与えておられるのです。禁じた木の実を食べたのかと尋ねると、アダムと女は自分たちの責任と罪を逃れようと「わたしではなくあの女」「わたしではなくヘビ」と自分には非はないと、他者へ責任転嫁



しています。他者のせいにするという弁解、言い訳は神が求めている応えではありません。神が求めているのは罪の告白です。間違っただけをしておめんなさいと素直に言える正直さを神は待ってられます。

神の裁きによって、ヘビは最も呪われた醜い姿へと変えられ、生涯地を這い、ちりを食べて生きていかななくてはならないという呪いを与えられ、人は善悪を知ったことによって霊的死（寿命）が与えられ、女は痛みを伴い出産をするという苦しみを、男は土を耕し日々の糧を得なくてはならないという労働の苦しみを負うことになりました。そしてエデンの園から追放されたのです。エデンの園の外の世界で苦難を伴い生きていく二人に、神は皮の衣を与えます。神を裏切り、罪を犯した二人のために、動物を犠牲にして衣を着せてくださる神の大きな愛が示されます。人の自立のスタートを、神は親心のような愛で送り出してくださったのです。

その後、女の子孫として誕生する救い主が、命と引き換えに罪に勝利されます。この希望のゆえに、アダムは女にエバ（すべての命の母）と名付けました。

人類の罪のルーツは最初の人アダムから始まっていました。その実を取って食べたならあなたは必ず死ぬと、神は言っておられたのに、人はおろかさゆえにその言葉を軽く捉え、自分から苦難と死を選び取ってしまいました。また、すでに驚くほどの恵みを与えられていたのに満足せず、今持っている物以上のものを持ちたいと願ってしまいました。神が与えてくださるものに満足できない貪欲な心を持っているのです。その罪のため、神から見えないように姿を隠し、神の御顔をまっすぐ見られない人間を、神はどこまでも訪ね、追い求め、「あなたはどこにいるのか」とご自分の前に姿を見せるよう、呼びかけ続けておられます。今も、私たちにそう声をかけてくださっています。

「私が座るのも、立つのも知り、私の計らいも、歩くのも、伏すのまでも知っておられる」と詩編 139 編でダビデが告白しています。神はすべてご存じで、神から隠れることなんて到底ありえないのです。

それでも、日々の生活の中で私たちは間違っただけをしてしまう弱さがあります。自分の過ちを素直に認めて謝ることが難しい場合もあります。「立って、父のところへ帰ってこう言おう、父よ、私は罪を犯しました。」ルカ福音書に記されている放蕩息子のように、自分の罪を認め、告白し、そして主イエスの十字架と復活を信じる時、人の罪は赦され、神は最善の恵みを持って手を差し伸べ救いの道へと招いてくださるのです。

わたしは、不従順で反抗する民に、一日中手を差し伸べた。（ローマ 10 章 21 節）

～分かち合い～

☆ 「あなたはどこにいるのか」と神さまに尋ねられたら、「わたしはここにいます」と、目標や希望を持って堂々と応えることができますか。

（担当：宇佐美 典子）



**7月30日(日) 創世記3章1-24節**

1 主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。蛇は女に言った。

「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」

2 女は蛇に答えた。

「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。3 でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」

4 蛇は女に言った。

「決して死ぬことはない。5 それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」

6 女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。7 二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。

8 その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れると、9 主なる神はアダムを呼ばれた。

「どこにいるのか。」

10 彼は答えた。

「あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから。」

11 神は言われた。

「お前が裸であることを誰が告げたのか。取って食べるなど命じた木から食べたのか。」

12 アダムは答えた。

「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました。」

13 主なる神は女に向かって言われた。

「何とということをしたのか。」

女は答えた。

「蛇がだましたので、食べてしまいました。」

14 主なる神は、蛇に向かって言われた。

「このようなことをしたお前は  
あらゆる家畜、あらゆる野の獣の中で  
呪われるものとなった。

お前は、生涯這いまわり、塵を食らう。

15 お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に

わたしは敵意を置く。

彼はお前の頭を砕き

お前は彼のかかとを砕く。」

16 神は女に向かって言われた。

「お前のはらみの苦しみを大きなものにする。

お前は、苦しんで子を産む。

お前は男を求め

彼はお前を支配する。」

17 神はアダムに向かって言われた。

「お前は女の声に従い

取って食べるなど命じた木から食べた。

お前のゆえに、土は呪われるものとなった。

お前は、生涯食べ物を得ようと苦しむ。

18 お前に対して

土は茨とあざみを生えいさせ

野の草を食べようとするお前に。

19 お前は顔に汗を流してパンを得る

土に返るときまで。

お前がそこから取られた土に。

塵にすぎないお前は塵に返る。」

20 アダムは女をエバ（命）と名付けた。彼女がすべて命あるものの母となったからである。 21 主なる神は、アダムと女に皮の衣を作って着せられた。

22 主なる神は言われた。

「人は我々の一人のように、善悪を知る者となった。今は、手を伸ばして命の木からも取って食べ、永遠に生きる者となるおそれがある。」

23 主なる神は、彼をエデンの園から追い出し、彼に、自分がそこから取られた土を耕させることにされた。 24 こうしてアダムを追放し、命の木に至る道を守るために、エデンの園の東にケルビムと、きらめく剣の炎を置かれた。

満天の星空を見あげて息を呑むほどの美しさに圧倒されても神の創造された宇宙のほんの僅かを見あげているにすぎません。私という存在のなんと小さく儂いものかとも思います。けれども神が創造された地に命を与えられたのは私という存在を神が愛してくださり出会ってくださったのだと信じています。

### 7月31日（月）マタイによる福音書10章16節

「わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに羊を送り込むようなものだ。だから、蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい。

私たちバプテストは伝道にとっても熱心に取り組む教派だと、他の教派の方から聞いたことがあります。そうです、私たちはみ言葉を証しする者として日々、養われている群れなのです。

### 8月1日（火）コリントの信徒への手紙一13章12節

わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。

いつも鏡で自分をみている顔と、映像に写された自分の顔に違いがあることに気づきます。案外、勘違いしている自分が居て、皆さんが、神が見ておられる姿が本当の自分であることを正直に受け止めることが出来るようになりたいと思っています。

### 8月2日（水）コリントの信徒への手紙二5章1-5節

1 わたしたちの地上の住みかである幕屋が滅びても、神によって建物が備えられていることを、わたしたちは知っています。人の手で造られたものではない天にある永遠の住みかです。 2 わたしたちは、天から与えられる住みかを上に着たいと切に願って、この地上の幕屋にあって苦しみもだえています。 3 それを脱いでも、わたしたちは裸のままではおりません。 4 この幕屋に住むわたしたちは

重荷を負ってうめいておりますが、それは、地上の住みかを脱ぎ捨てたいからではありません。死ぬはずのものが命に飲み込まれてしまうために、天から与えられる住みかを上に着たいからです。5わたしたちを、このようになるのにふさわしい者としてくださったのは、神です。神は、その保証として“霊”を与えてくださったのです。

私はどこまでいっても「私・自分」が前にでてしまう存在です。すなわちエゴが自分のなかのとれない棘としていつまでもあることを告白しなければなりません。聖霊の助け導きがなければ糸の切れた凧のようにどこへいくか自分でもわからないのです。

### 8月3日(木) 歴代誌上5章1-2節

1 イスラエルの長男ルベンの子孫について。ルベンは長男であったが、父の寝床を汚したので、長子の権利を同じイスラエルの子ヨセフの子孫に譲らねばならなかった。そのため彼は長男として登録されてはいない。2 彼の兄弟の中で最も勢力があったのはユダで、指導者もその子孫から出たが、長子の権利を得たのはヨセフである。

私たちはさまざまな人間関係に苦しめられます。ならば一人が良いと思っても孤独には耐えられません。

神は私たちに賜物を与えてくださっています。ご自分の主からの賜物を活かして生きていくなれば平安が与えられると私は信じています。

### 8月4日(金) ルカによる福音書15章25-31節

25 ところで、兄の方は畑にいたが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきた。26 そこで、僕の一人を呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。27 僕は言った。『弟さんが帰って来られました。無事な姿で迎えたというので、お父上が肥えた子牛を屠られたのです。』28 兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。29 しかし、兄は父親に言った。『このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。30 ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。』31 すると、父親は言った。『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。』

人間は欲深い存在です。どんなに豊かであっても足りないと思ひますし、それが他者のものでも奪いたくなる衝動にかられる弱く罪深い存在です。けれども、それらのものを求めるよりも主がいつもあなたと共にいてくださる。これに勝る宝はないのです。

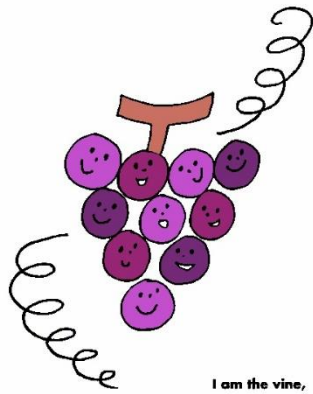
### 8月5日(土) ヨハネによる福音書15章16節

あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。

神は神につながってしようと心に決めた人は、すべて救われます。これは生まれる前からすでに救われる人が決められているということではありません。地上に神から命を与えられた私たちは皆、神と出会うなかで命を与えられた本当の意味を知るのです。

(担当：郷 秀男)





I am the vine,  
you are the branches  
John 15:5

2023.7 成人科